



## 大学院生のキャリア発達

著者	野末 武義
雑誌名	明治学院大学心理学部附属研究所年報 = Annual Report of the Meiji Gakuin Institute for Psychological Research
巻	5
ページ	43-44
発行年	2012-05
その他のタイトル	Career development of graduate students
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/00003741">http://hdl.handle.net/10723/00003741</a>

## 【特集1】

## 大学院生のキャリア発達

調査・研究部門主任 野末 武義

今から25年ほど前、まだ臨床心理士資格も存在しなかった頃、筆者の学部時代の指導教員がある専門雑誌の中で、「男が臨床心理の道で家族を養っていくのは、小説家になろうとするようなもの」と書いておられた。当時は、心理臨床の道を志す学生は少なく、言ってみれば一握りの「変わり者」の職業選択であったし、どのようにして一人前の専門家になっていくか、そのキャリア発達は個々人の努力に任されていた。しかし現在では、臨床心理士養成指定大学院は全国に160校以上存在し、臨床心理士有資格者も全国で23,000人以上にのぼる。学部レベルでも心理学は一時期のブームは下火になったとはいえ、一昔前とは違い「ごく普通の」学生が将来心理臨床の専門家になることを考えている。それゆえに、そうした学生たちのキャリア発達を支援することは、大学としても積極的に取り組まなければならない重要な課題である。

心理学を学んだ学部生が、臨床心理士や臨床発達心理士などの専門家になることを考え、大学院に進学するかどうしようか迷う最も大きな要因は、専門家としての仕事の厳しさや責任の重さだけでなく、果たして生活していけるかどうかという経済的不安であろう。臨床心理士や臨床発達心理士が広く社会に知られるようにはなったものの、その勤務条件は全体としては極めて厳しい状況は、大きくは変わっていない。とりわけ若手は、就職先を探すところから苦勞をし、常勤職は極めて限られているため、非常勤の仕事をいくつかかけ持ちして多忙な毎日を過ごしている。そして、経済的には極めて厳し

い状況にありながらも、学会や研修会などに参加することでスキルアップに励んでいるが、当然のことながら多くの人たちが、いつまでこのような状況が続くのか、さらには、果たして自分は結婚はできるのか、といった将来に対する不安を抱きながら仕事を続けている。

少なからずの学部生は、こうした厳しい状況について授業などを通して徐々に理解する中で、大学院進学を諦め一般企業などに就職していく。一方、専門家を志すことを選択し大学院に進学した学生たちは、講義や実習に追われる毎日を送りながら、臨床現場での仕事の厳しさや難しさ、そして責任の重さを、体験を通して徐々に実感するようになり、「自分が選んだ道は本当に正しかったのか」「自分は本当に専門家としてやっていけるのか」という不安も強く感じるようになる。つまり、大学院生になったからと言って将来に対する不安が無くなるわけではなく、むしろ自分自身に向き合わざるを得なくなり、再度アイデンティティが揺さぶられると言っても過言ではない。

大学院生がそのような状況を乗り越えていくためには、何よりもまず、講義や実習を通してより高度な専門的知識を身につけ、臨床的スキルを磨くことが第一であり、そこには教員の積極的で継続的な関わりと教員間の連携が必要不可欠である。また、教員は学生との関わりの中で、専門家としての良き同一化モデルとして機能することも望まれる。しかしながら、時に学生から見ると、教員はすでに臨床家として“成功している人”であり、“悩んだり迷ったりしたことがない”人のように見えてしまうことも珍しくないようである。つまり、学生が教員を

上手く理想化して自己に取り入れられればまだ良いが、自分との違いや距離を感じてしまっただけで自信を失ったり、悩みを打ち明けにくくなったりすることにもつながりかねない。

このような学生と教員の距離を埋めてくれるのが、大学院の修了生という先輩の存在である。とりわけ、現場に出て数年ほどの若手の修了生は、大学院生にとって自分の近い将来を想像できる良き先輩であり、教員とは異なる指導的な役割を果たしてくれる。修了生から就職活動にまつわる話を聞いたり、現場での仕事の実状を知るとは、大学院生にとって現場に出る前の準備教育の意味を持つ。また、修了生が自らの大学院での生活をふりかえりアドバイスしてくれることは、大学院生が自分自身の学業への取り組み方や生活の仕方を見直し、専門家を志す者としての一層の自覚を促すことにつながる。

こうしたことを踏まえ、本研究所では特別研究プロジェクトの一環として、2010年度には臨床心理学コースと教育・発達心理学コースの修了生2名を講師に迎え、両コースの大学院生を対象に講演を行い、大学院生からも好評を得ることができた。加えて2011年度には、本号の木田論文にもあるように、大学院生にとっても最も身近な先輩である心理臨床センターのカウンセラーとアシスタントカウンセラーがキャリア支援プログラムを実施することができた。これは教員主導ではなく、先輩が後輩をサポートしたいという自主的な活動として実施されたものであり、参加した大学院生からも大変好評であった。今後はさらに充実した活動が展開されていくことが期待される。

今、社会はこれまで以上に多くのそして質の高い心理臨床の専門家を必要としている。大学院での専門教育は、大学院生が将来現場で責任を持って仕事を引き受けられる人材に成長できるよう、その基礎の部分を守る責任がある。

そのためにも、単に知識と技術を教える教育ではなく、大学院生が専門家としての自覚と責任感を持ちながら、専門家としてのキャリア発達にも真剣に向き合っていけるよう、さまざまなサポートを提供していかなければならないだろう。